

国内の畜産物の需給動向

牛肉

8年1月の牛肉生産量、前年同月比1.5%減

生産量

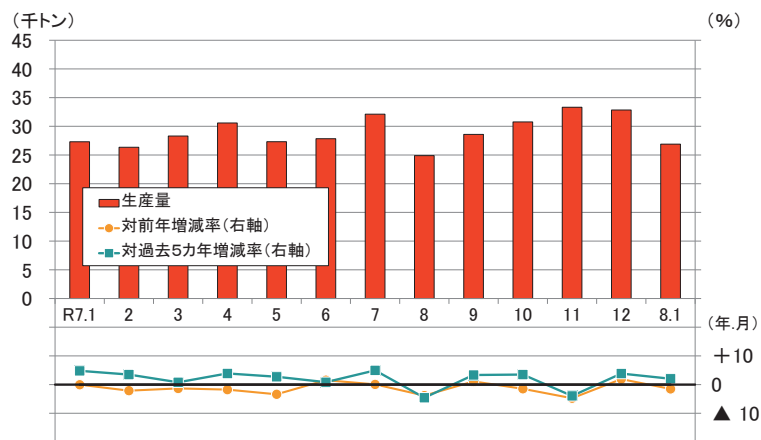
令和8年1月の牛肉生産量^(注1)は、2万6897トン（前年同月比1.5%減）と前年同月をわずかに下回った（図1）。品種別では、和牛は1万3666トン（同0.2%減）、交雑種は7463トン（同0.0%減）と、ともに前年

同月並み、乳用種は5726トン（同6.1%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

なお、過去5カ年の1月の平均生産量との比較では、2.0%増とわずかに上回る結果となった。

（注1）生産量の合計は、その他の牛、子牛を含む。

図1 牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量

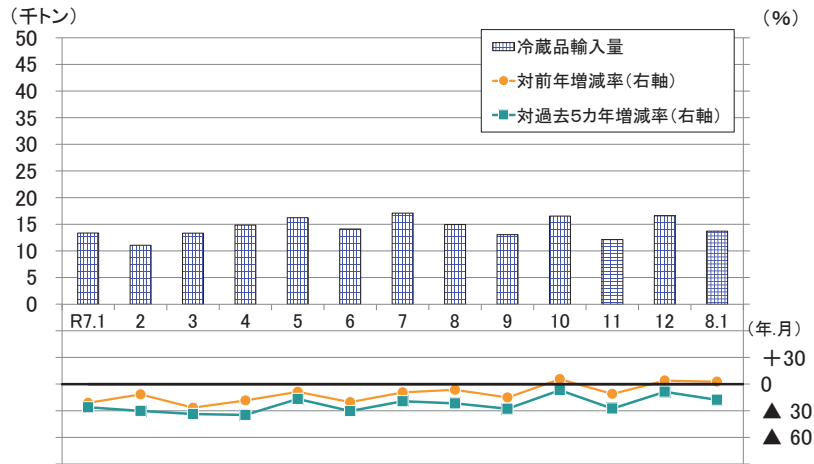
1月の輸入量について、冷蔵品では、現地価格の高止まりなどにより主要輸入先である米国産の輸入量が減少した一方、豪州産およびカナダ産の輸入量が増加したことなどから、1万3711トン（前年同月比2.6%増）と前年同月をわずかに上回った（図2）。冷凍品では、豪州産のうち主に加工用のひき材などに使用されるトリミングの輸入量が増加

したことなどから、2万6025トン（同35.7%増）と前年同月を大幅に上回った（図3）。この結果、輸入量の合計^(注2)でも、3万9771トン（同22.2%増）と前年同月を大幅に上回った。

なお、過去5カ年の1月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は17.7%減と大幅に下回った一方、冷凍品は11.5%増とかなり大きく上回る結果となった。

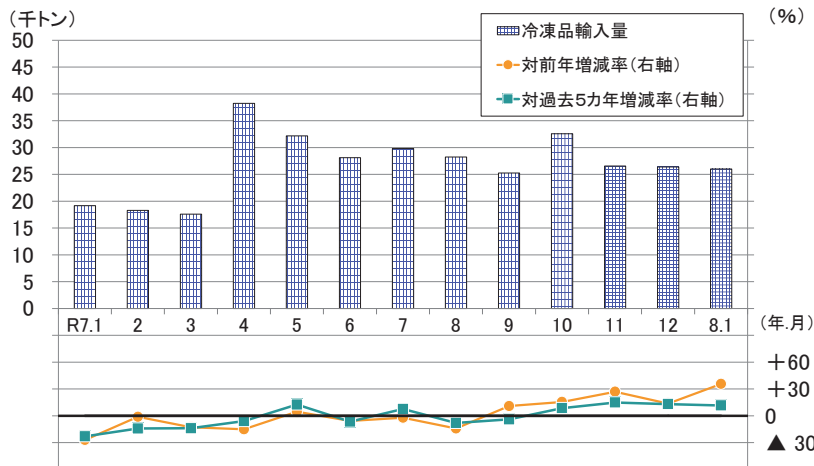
（注2）輸入量の合計は、煮沸肉、ほほ肉、頭肉を含む。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量等

1月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）^(注3)は142グラム（前年同月比6.1%減）と前年同月をかなりの程度下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の1月の平均消費量との比較でも、17.6%減と大幅に下回る結果となった。

1月の外食産業全体の売上高は、年始の家族客などの需要が好調となった他、その後も

週末を中心に堅調に推移したことなどから、前年同月比8.5%増と前年同月をかなりの程度上回った（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。

このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態として、ハンバーガー店を含むファストフードの洋風は、期間限定商品や各種キャンペーンの好調などから、同11.1%増と前年同月をかなり大きく上回った。また、牛丼店を含むファストフードの和風は、人気商品の復活などから、同12.8%増と前年同月を

かなり大きく上回った。ファミリーレストランの焼き肉は、29日の「ニクの日」キャンペーンや主力商品のメニュー改定などにより集客が好調で、同7.0%増と前年同月をかなりの程度上回った。

(注3) 1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

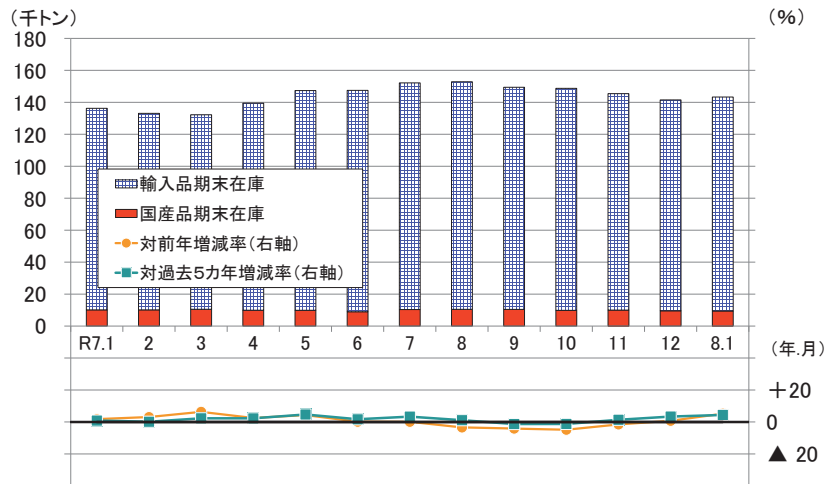
推定期末在庫・推定出回り量

1月の推定期末在庫は、14万3302トン（前年同月比5.2%増）と前年同月をやや

上回った（図4）。このうち、国産品は9450トン（同6.7%減）と前年同月をかなりの程度下回った一方、在庫の大半を占める輸入品は13万3852トン（同6.1%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

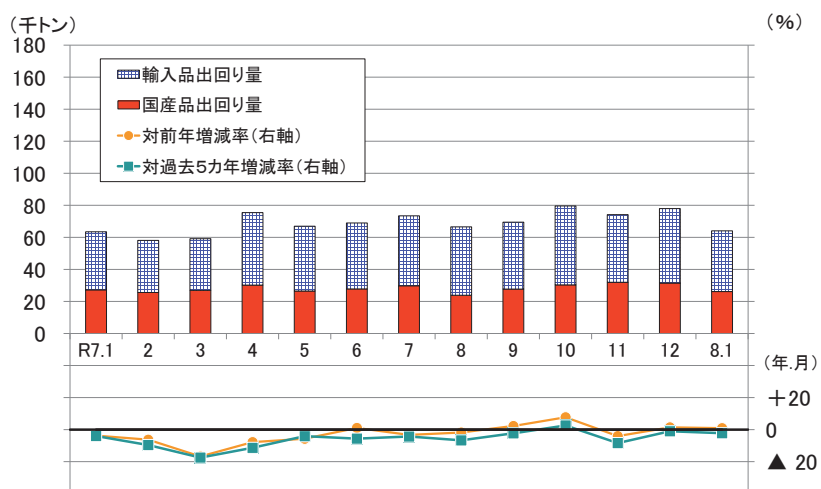
推定出回り量は、6万4059トン（同0.9%増）と前年同月をわずかに上回った（図5）。このうち、国産品は2万6178トン（同3.9%減）と前年同月をやや下回った一方、輸入品は3万7880トン（同4.5%増）と前年同月をやや上回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部)

豚肉

8年1月の豚肉生産量、前年同月比0.9%増

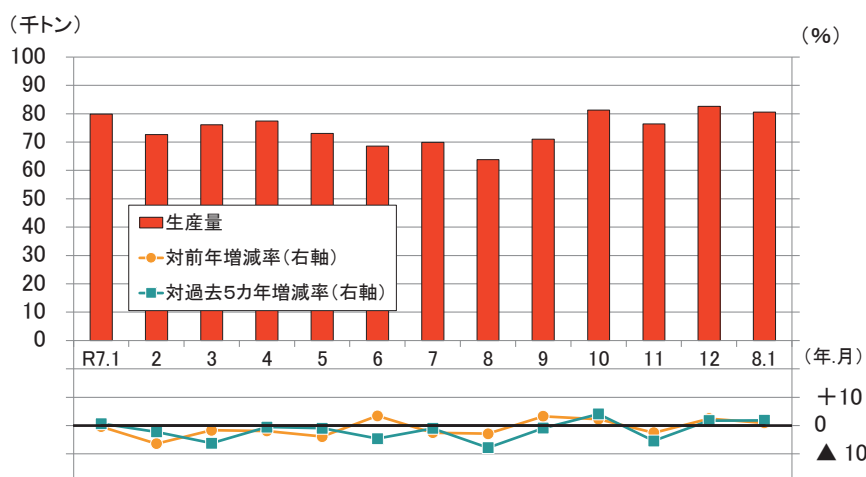
生産量

令和8年1月の豚肉生産量は、8万664トン（前年同月比0.9%増）と前年同月を

わずかに上回った（図1）。

なお、過去5カ年の1月の平均生産量との比較でも、1.9%増とわずかに上回る結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量

1月の輸入量について、冷蔵品は、価格や規格などで一定の評価を受けるカナダ産や、メキシコ産が増加したことなどから、3万6131トン（前年同月比12.7%増）と前年同月をかなり大きく上回った（図2）。冷凍品は、現地相場高や為替相場の影響、国内の輸入品在庫が高水準にあることにより前年同月比で減少して推移してきた中、12月はアフリカ豚熱発生によるスペイン産の輸入一時停止措置^(注1)の影響も加わったことなどから前年同月を大幅に下回ったところ、1月は停止措置の対象外となったものの通関が進んだ

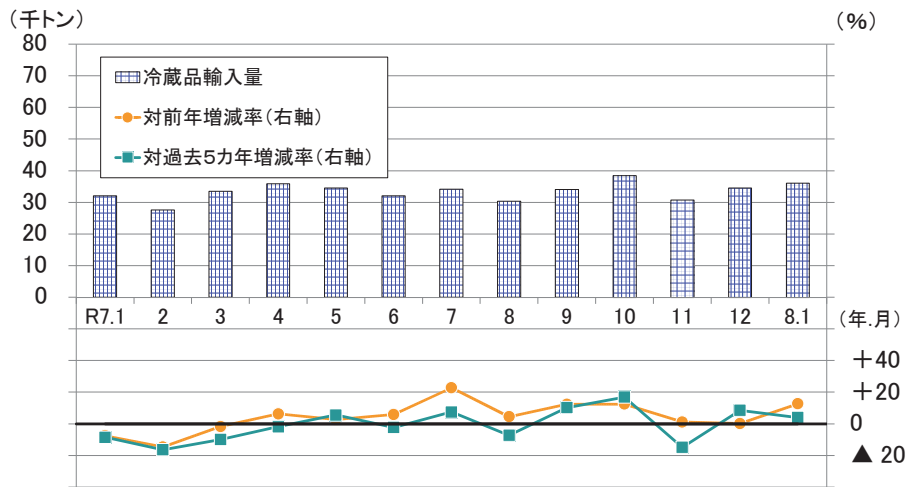
ことなどから、4万6940トン（同3.1%減）と前年同月をやや下回った（図3）。この結果、輸入量の合計^(注2)では、8万3073トン（同3.2%増）と前年同月をやや上回った。

なお、過去5カ年の1月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は4.0%増とやや、冷凍品は15.7%増とかなり大きく、いずれも上回る結果となった。

(注1) 農林水産省は令和7年11月28日にスペイン産豚肉等の輸入を一時停止。その後、同年10月29日以前にと殺・加工・梱包まで終了しているものであり、かつ輸出されるまでの間、防疫上安全かつ衛生的に保管および輸送されたものであることをスペイン政府が証明しているものについては、輸入停止措置の対象外とすることを発表。

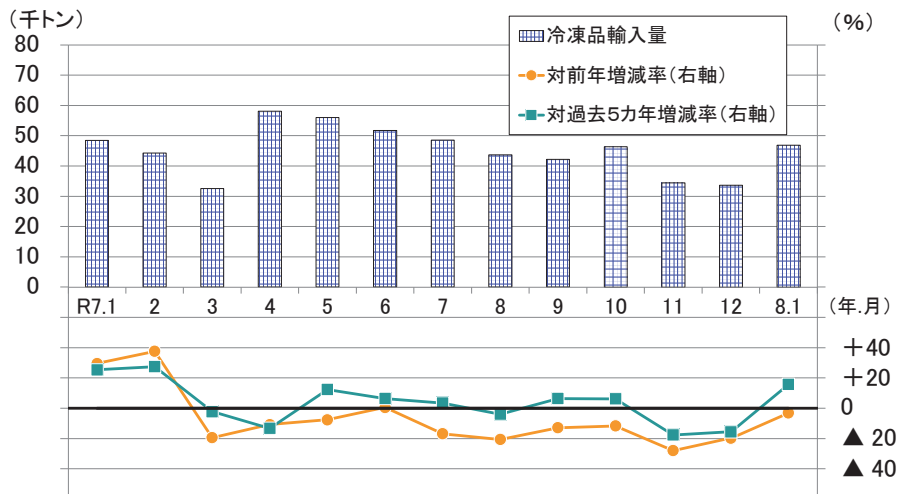
(注2) 輸入量の合計は、くず肉を含む。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量

1月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）^(注3)は、667グラム（前年同月比7.3%増）と前年同月をかなりの程度上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の1月の平均消費量との比較でも、3.1%増とやや上回る結果となった。

（注3）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

推定期末在庫・推定出回り量

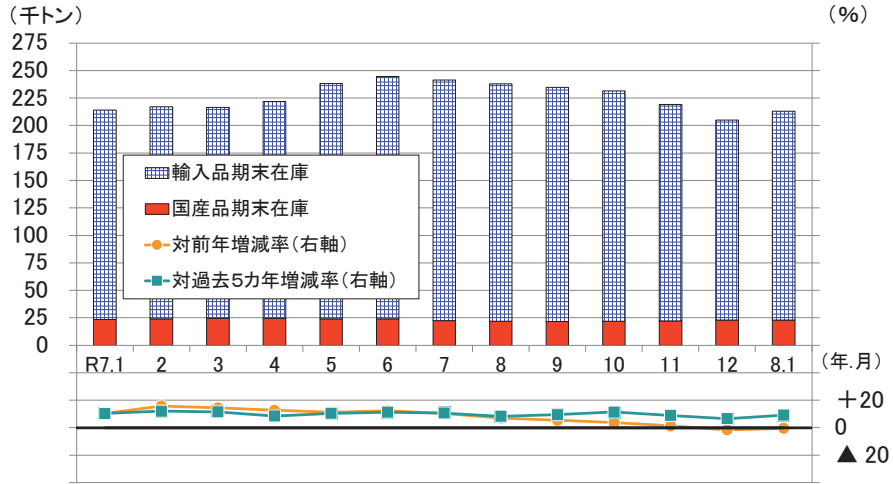
1月の推定期末在庫は、21万3087トン（前年同月比0.4%減）と前年同月をわずかに下回った（図4）。このうち、国産品は2万2910トン（同2.7%減）と前年同月をわずかに下回った一方、在庫の大半を占める輸入品は19万177トン（同0.2%減）と前年同月並みとなった。

推定出回り量は、15万5531トン（同

0.7%増)と前年同月をわずかに上回った(図5)。このうち、国産品は8万567トン(同2.3%増)と前年同月をわずかに上回った

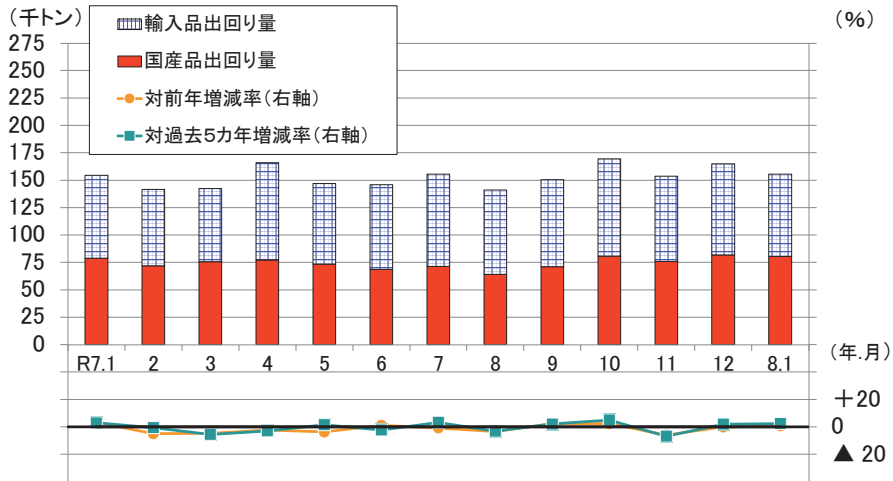
一方、輸入品は7万4964トン(同1.0%減)と前年同月をわずかに下回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部)

鶏肉

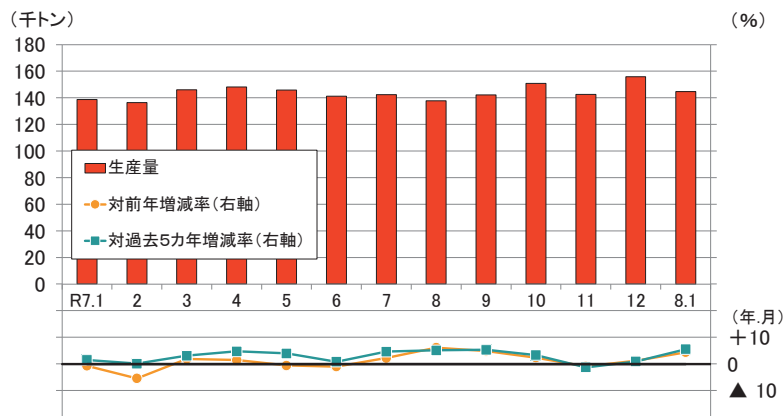
8年1月の鶏肉生産量、前年同月比4.4%増

生産量

令和8年1月の鶏肉生産量は、14万4742トン（前年同月比4.4%増）と前年同月をやや上回った（図1）。

なお、過去5カ年の1月の平均生産量との比較でも、5.5%増とやや上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移



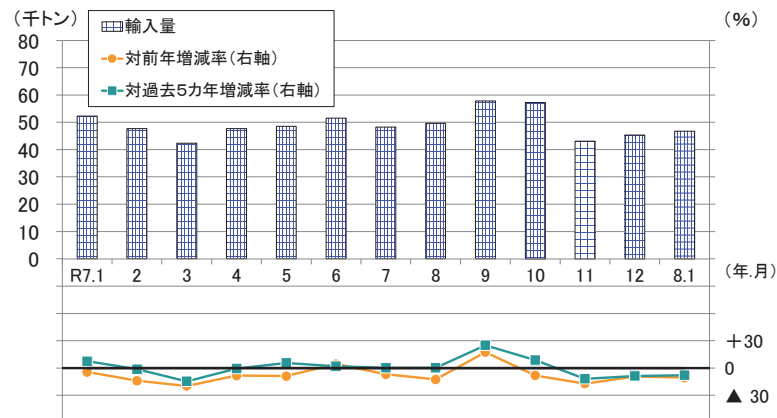
資料：農畜産業振興機構調べ
注1：骨付き肉ベース。
注2：成鶏肉を含む。

輸入量

1月の輸入量は、主要輸入先における労働者不足により生産量が減少した影響などを受けて、4万6822トン（前年同月比10.5%減）

と前年同月をかなりの程度下回った（図2）。
なお、過去5カ年の1月の平均輸入量との比較でも、7.9%減とかなりの程度下回る結果となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家さん肉を含まない。

家計消費量

1月の鶏肉の家計消費量（全国1人当たり）^(注)は、546グラム（前年同月比0.5%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の1月の平均消費量との比較でも、3.0%増とやや上回る結果となった。

(注) 1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

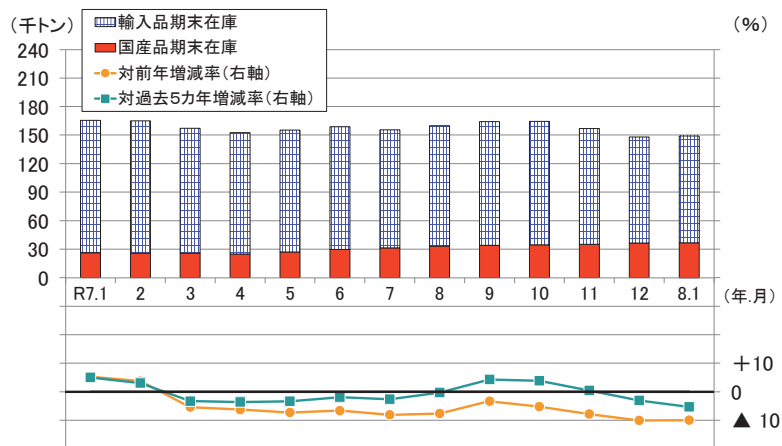
推定期末在庫・推定出回り量

1月の推定期末在庫は、14万9029トン

（前年同月比9.9%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図3）。このうち、輸入品は11万2209トン（同19.4%減）と前年同月を大幅に下回った。

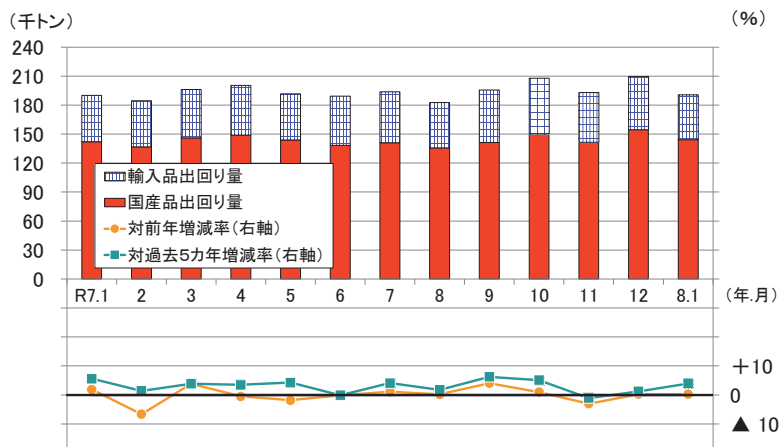
推定出回り量は、19万567トン（同0.3%増）と前年同月並みとなった（図4）。このうち、国産品は14万4298トン（同1.6%増）と前年同月をわずかに上回った一方、輸入品は4万6269トン（同3.8%減）と前年同月をやや下回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部)

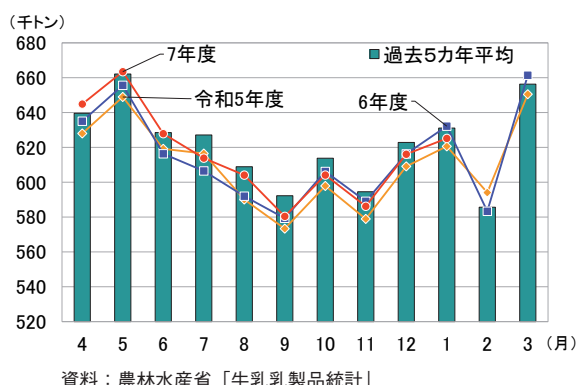
牛乳・乳製品

8年1月のバターおよび脱脂粉乳の生産量は11カ月ぶりに前年を下回る

1月の全国の生乳生産量、4カ月連続で下回る

令和8年1月の生乳生産量は、62万5154トン（前年同月比1.1%減）と、4カ月連続で前年同月を下回った（図1）。地域別では、北海道が36万1474トン（同1.1%減）と、2カ月ぶりに前年同月を下回った。また、都府県でも26万3680トン（同1.1%減）と、5カ月連続で下回った。

図1 生乳生産量の推移



1月の生乳処理量を見ても、牛乳等向けは30万9486トン（同0.5%減）と、6カ月連続で前年同月を下回った。このうち、業務用向けについては2万3133トン（同0.4%減）と、8カ月連続で下回った。

一方、乳製品向けは31万2116トン（同1.7%減）と、11カ月ぶりに前年同月を下回った。これを品目別に見ると、クリーム向けは5万9623トン（同0.1%減）と3カ月連続で下回った一方で、チーズ向けは3万9142

トン（同1.3%増）と5カ月連続で上回った。また、脱脂粉乳・バター等向けは、16万9611トン（同2.3%減）となり、18カ月ぶりに前年同月を下回った（農畜産業振興機構調べ「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

全国の1月の牛乳生産量、6カ月連続で下回る

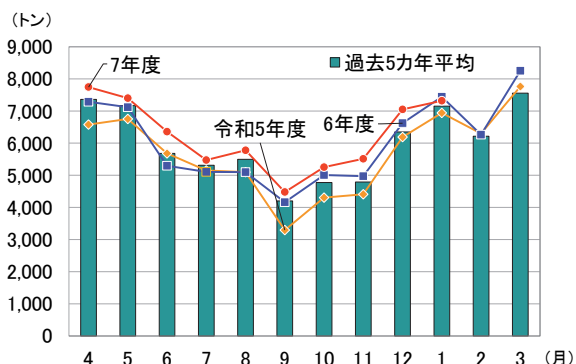
1月の牛乳等生産量を見ると、飲用牛乳等のうち牛乳は、24万8580キロリットル（前年同月比0.7%減）と6カ月連続で前年同月を下回った。成分調整牛乳は前年割れが継続しており、1万5903キロリットル（同7.2%減）となった。また、加工乳についても、1万2834キロリットル（同1.8%減）と6カ月連続で前年同月を下回った。

はっ酵乳は8万5518キロリットル（同3.2%減）と、2カ月ぶりに下回った。

1月末のバター在庫量、前年同月比23.3%増

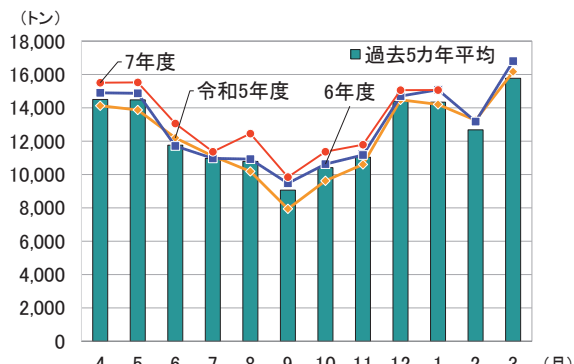
1月のバターの生産量は7318トン（前年同月比1.7%減）と11カ月ぶり、前年2月に前年同月を下回ったのがうるう年の影響であることを踏まえると、実質18カ月ぶりに前年同月を下回った（図2）。一方、出回り量は5352トン（同8.9%増）と8カ月ぶりに上回った（農畜産業振興機構調べ）。在庫量については、17カ月連続で前年同月を上回り、1月末は3万1670トン（同23.3%増）となった（図3）。

図2 バターの生産量の推移



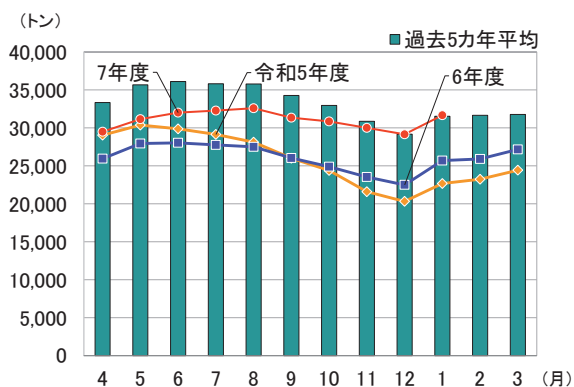
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図4 脱脂粉乳の生産量の推移



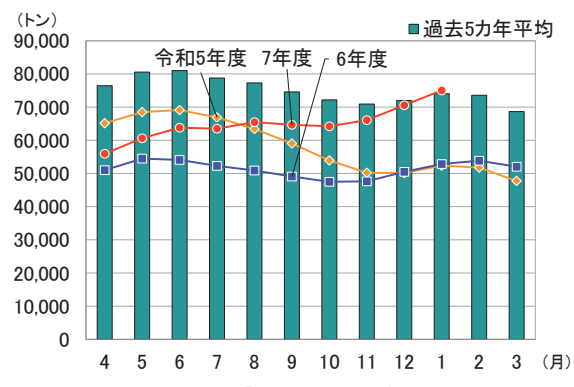
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図3 バターの在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図5 脱脂粉乳の在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

1月末の脱脂粉乳在庫量、前年同月比42.0%増

1月の脱脂粉乳の生産量は、1万5067トン（前年同月比0.1%減）と、バターと同様に11カ月ぶり、実質18カ月ぶりに前年同月を下回った（図4）。また、出回り量は1万617トン（同16.6%減）と12カ月連続で下回った（農畜産業振興機構調べ）。在庫量は、7万5039トン（同42.0%増）と14カ月連続で前年同月を上回った。（図5）。

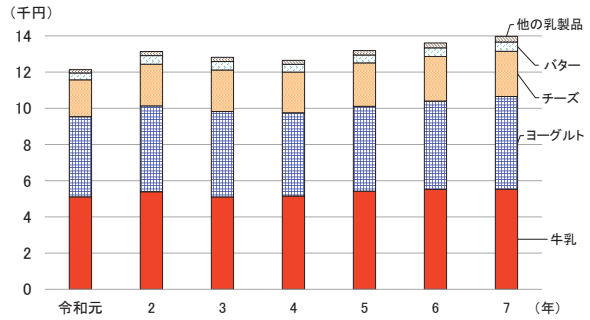
令和7年1人当たり牛乳・乳製品支出金額、3年連続で前年を上回る

総務省が令和8年2月に公表した家計調査によると、7年（1～12月）の全国1人当たりの牛乳・乳製品の支出金額は1万4353円（前年比3.2%増）と、3年連続で前年を上回った（図6）。これは、7年度期中の乳価改定のほか、原材料費やエネルギー価格の高騰などの影響による製品価格の値上げが主な要因になったと考えられる。

内訳を見ると、牛乳が5531円（同0.1%増）と前年並み、チーズが2499円（同1.4%増）とわずかながら前年を上回り、ヨーグルトは

5119円（同5.0%増）とやや、バターは514円（同8.4%増）とかなりの程度上回った。

図6 牛乳・乳製品の支出金額（全国1人当たり）の推移



資料：総務省「家計調査」

注1：1世帯（2人以上の世帯）当たりの数値を当該年の世帯人数で除して算出。

注2：消費税を含む。

注3：贈答用など自家消費以外のものを含む。

（酪農乳業部）

鶏卵

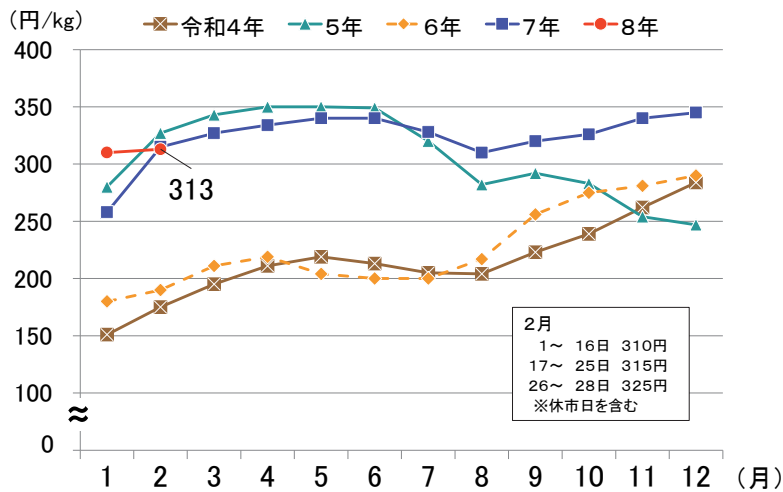
8年2月の鶏卵卸売価格、前年同月比0.6%安

卸売価格

令和8年2月の鶏卵卸売価格（東京、Mサイズ基準値）は、1キログラム当たり313円（前年同月差2円安、前年同月比0.6%安）と、

前年同月の同価格をわずかに下回った（図）。同価格の日ごとの推移を見ると、月初の同310円から17日には同315円、26日には同325円と計2回の上昇があり、月間の上昇幅は同15円となった。なお、過去5カ年の

図 鶏卵卸売価格（東京、Mサイズ基準値）の推移



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」

注：消費税を含まない。

2月の平均卸売価格は238円であり、それと比較すると、31.5%高と大幅に上回る結果となった。

供給面については、全国的な高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）の発生があり、年末年始は相場が例年以上に高水準になることを見越し、産地では生産量を維持する動きなどもあったものの、低位で推移した。需要面については、主に外食筋において、訪日外客数が比較的增加傾向であることなどから、堅調に推移した。

家計消費量

1月の鶏卵の家計消費量（全国1人当たり）^(注)は、843グラム（前年同月比6.1%減）と前年同月をかなりの程度下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の1月の平均消費量との比較でも、7.8%減とかなりの程度下回る結果となった。

(注) 1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

（畜産振興部）

令和7年の牛および豚枝肉の格付結果

公益社団法人日本食肉格付協会は、令和8年2月17日に、7年（1～12月）の「牛枝肉格付結果（品種別・性別）」および「豚枝肉格付結果」を公表した。

牛枝肉の格付実施率は、成牛のと畜頭数（108万9214頭）に対して86.0%と前年から1.0ポイント増加となった一方、豚枝肉の格付実施率は、と畜頭数（1606万5213頭）に対して76.1%と前年から0.4ポイント減少した。以下、畜種ごとの格付結果を紹介する。

【牛肉】「A-5」の格付頭数は6年連続で15等級の中で最多に

令和7年の牛のと畜頭数は109万4195頭と、前年比で1.9%減少した。品種別に見ると、和牛は55万4281頭（前年比2.2%増）、乳用牛は27万5867頭（同9.9%減）、交雑牛は25万8162頭（同1.0%増）、外国種などを含むその他の牛は904頭（同82.7%減）となった。

このような中、同年の牛枝肉の総格付頭数は、同年の成牛のと畜頭数が減少（同1.8%減）したことから、93万6561頭（同0.7%減）と前年をわずかに下回った。品種別の格付頭数を見ると、「和牛」は同3.0%増（53万8612頭）、「交雑牛」は同1.0%増（24万3656頭）と前年を上回った一方、「乳用牛」は同11.6%減（15万3604頭）、外国種などを含む「その他の牛」は同86.2%減（689頭）と前年を下回った。

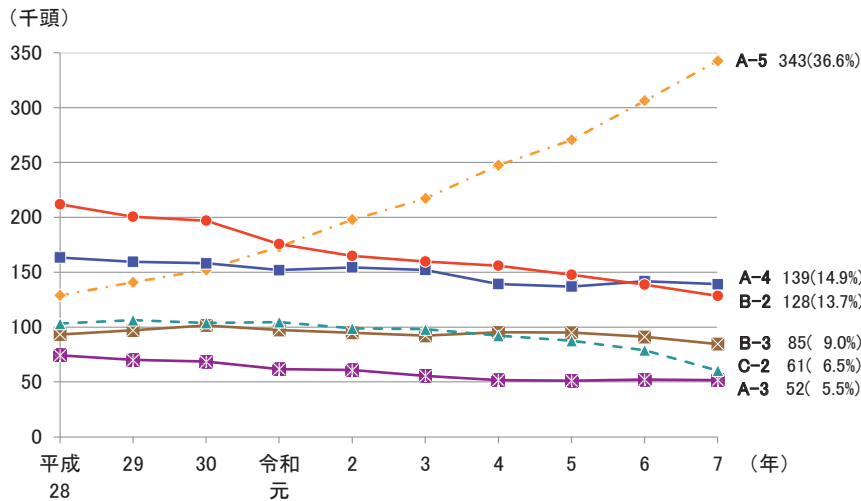
牛肉は、「歩留等級（A～C）」と「肉質等級（5～1）」を組み合わせた15段階で格付されている。歩留等級とは、枝肉から得られる部分肉の割合を評価し、部分肉歩留が標準より良いものはA、標準のものはB、標準より劣るものはCと判定される。また、肉質等級とは、（1）脂肪交雑（サシ）、（2）肉の色沢、（3）肉の締まりおよびきめ、（4）脂肪の色沢と質一の4項目を5段階で評価し、四つの項目中、最も低い等級が肉質等級とし

で判定される。

7年の全体における等級ごとの格付頭数の推移を見ると、「A-5」が34万2771頭（同11.8%増）と前年をかなり大きく上回り、6年連続で15等級の中で最多となった（図1）。全体に占める割合は36.6%となり、前年から4.1ポイント増加した。「A-5」の内訳を見ると、和牛去勢が58.6%、和牛めすが39.7%と、和牛で98.2%となっている。「A-4」は、13万9177頭（同1.9%減）

と前年をわずかに下回り、「A-5」に次いで多く、全体の14.9%を占めた。「B-2」がその次に続いているが、近年減少傾向が続いており、7年は、12万8458頭（同7.5%減）と前年をかなりの程度下回り、全体の13.7%を占めた。「B-2」のうち5割強を乳用牛が占めており、乳用牛のと畜頭数の減少が「B-2」の格付頭数の減少の主な要因の一つとなっている。

図1 主要な等級別格付頭数の推移

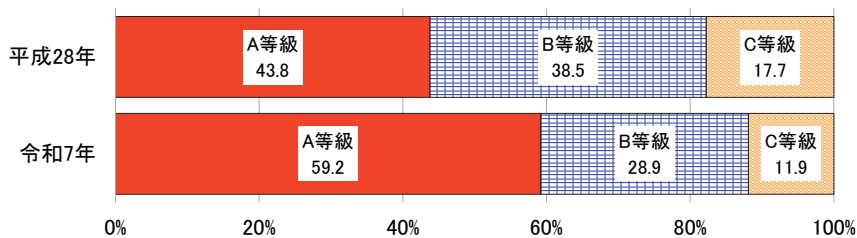


資料：(公社) 日本食肉格付協会
注：カッコ内は構成比。

7年の歩留等級別の格付構成比を平成28年と比較すると、全体に占める「A等級」の割合は59.2%と、15.4ポイント増加した（図2）。また、肉質等級別の格付構成比を見ると、

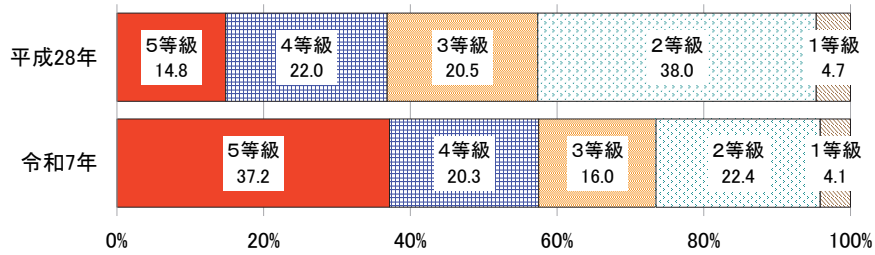
全体に占める「5等級」の割合は37.2%と28年から22.4ポイント増加した一方、「4等級」は20.3%と同1.7ポイント減少した（図3）。

図2 歩留等級別の格付構成比



資料：(公社) 日本食肉格付協会
注：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない場合がある。

図3 肉質等級別の格付構成比



資料：(公社) 日本食肉格付協会

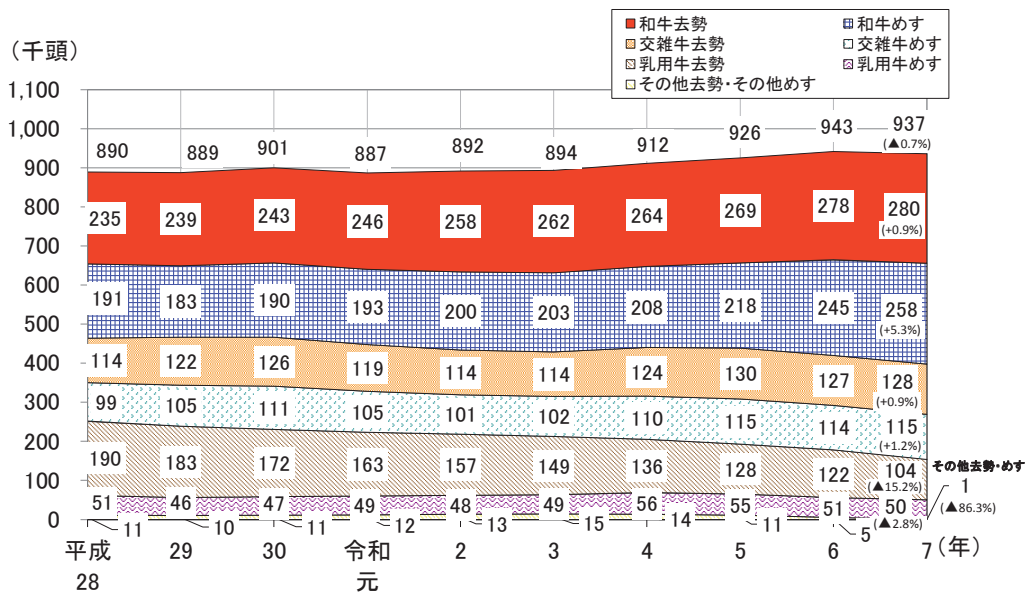
注：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない場合がある。

7年の品種別・性別の格付頭数を見ると、和牛去勢が28万161頭（前年比0.9%増）と最も多く、次いで和牛めすが25万8282頭（同5.3%増）、交雑牛去勢が12万8307頭（同0.9%増）、交雑牛めすが11万5326頭（同1.2%増）、乳牛去勢が10万3562頭（同

15.2%減）となった（図4）。

なお、品種別の割合は、和牛が57.5%（同2.0ポイント増）、交雑牛が26.0%（同0.4ポイント増）、乳用牛が16.4%（同2.0ポイント減）、その他の牛が0.1%（同0.5ポイント減）となった。

図4 品種別・性別格付頭数の推移



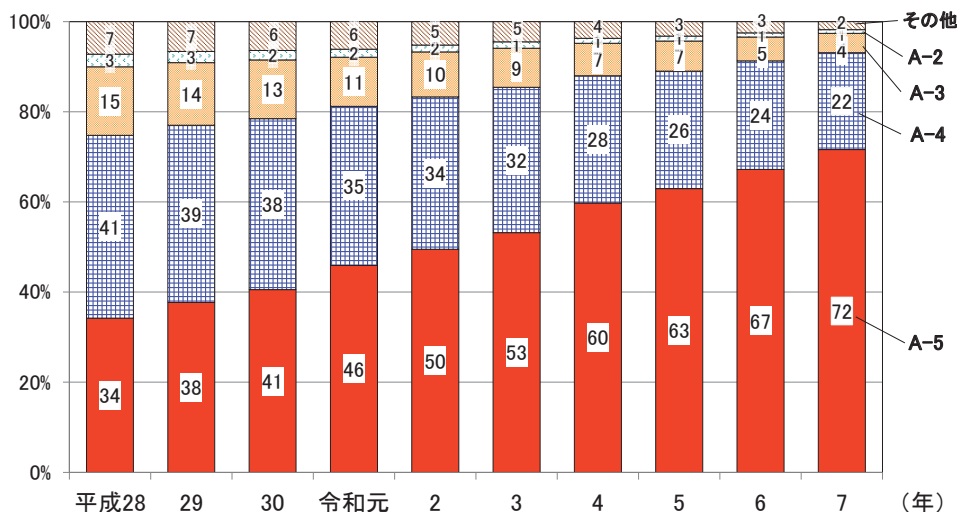
資料：(公社) 日本食肉格付協会

注：カッコ内は前年比。

7年の品種別・性別ごとの格付構成割合を見ると、和牛去勢は、「A-5」が71.7%と、前年から4.5ポイント増加した一方、「A-4」は21.5%と同2.6ポイント、「A-3」

は4.3%と同1.0ポイントそれぞれ減少した（図5）。なお、和牛去勢全体に占める「A等級」の割合は、98.2%（同0.7ポイント増）となった。

図5 牛枝肉格付構成割合の推移（和牛去勢）

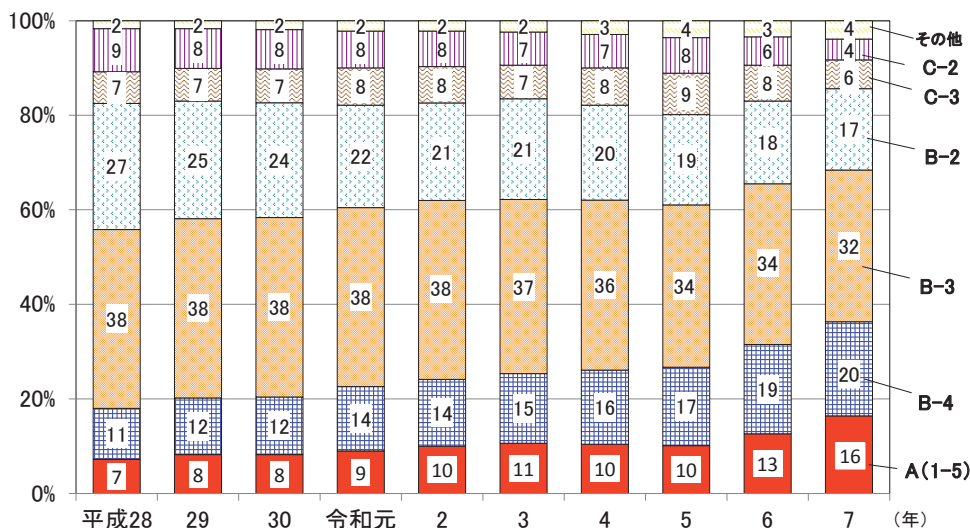


資料：(公社) 日本食肉格付協会
注：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない場合がある。

交雑牛去勢は、「B-3」が最も多く、32.1%と前年から1.9ポイント減少した。次いで多い「B-4」は19.9%と同1.0ポイ

ント増加した一方、3番目に多い「B-2」は17.2%と同0.3ポイント減少した(図6)。なお、上位三つで全体の69.2%を占める。

図6 牛枝肉格付構成割合の推移（交雑牛去勢）

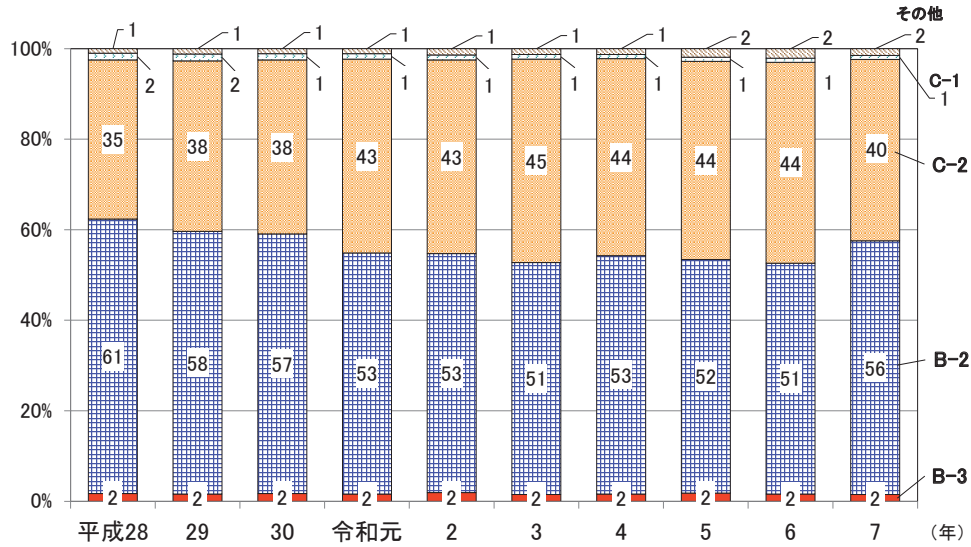


資料：(公社) 日本食肉格付協会
注：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない場合がある。

乳用牛去勢は、「B-2」が最も多く、56.1%と同5.2ポイント増加した一方、「C-

2」は40.1%と同4.2ポイント減少した(図7)。なお、上位二つで全体の96.2%を占める。

図7 牛枝肉格付構成割合の推移（乳用牛去勢）



資料：(公社) 日本食肉格付協会

注：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない場合がある。

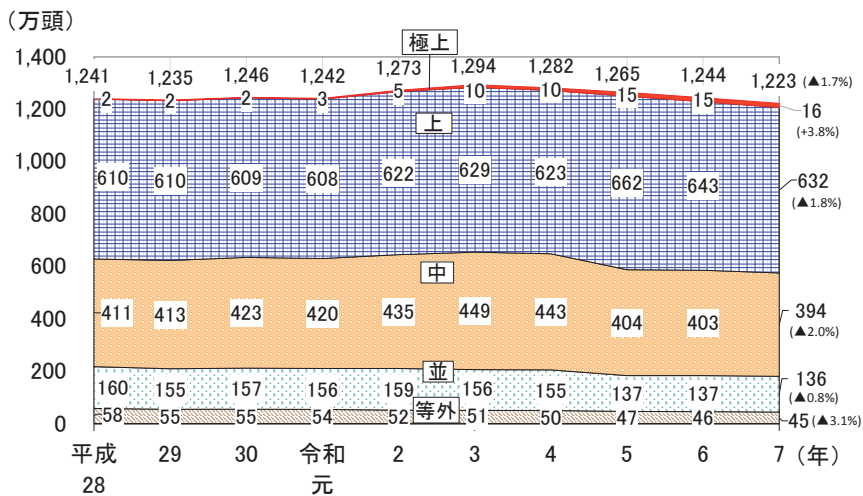
【豚肉】 令和7年の格付構成比、「上」が51.7%、「中」が32.2%

豚肉は、枝肉の重量および背脂肪の厚さ、外観（均称、肉づき、脂肪付着、仕上げ）、肉質（肉の締まりおよびきめ、肉の色沢、脂肪の色沢と質、脂肪の沈着）の基準に照らして、「極上」、「上」、「中」、「並」、「等外」の

5等級に格付される。なお、令和5年1月より26年ぶりに改正された豚枝肉取引規格が適用されている^(注)。

7年の豚枝肉の総格付頭数は、1222万5226頭（前年比1.7%減）と前年をわずかに下回った（図8）。等級別の格付頭数を見ると、「上」が631万5009頭（同1.8%減）と最も多く、次いで「中」が394万4239頭

図8 豚枝肉等級別格付頭数の推移



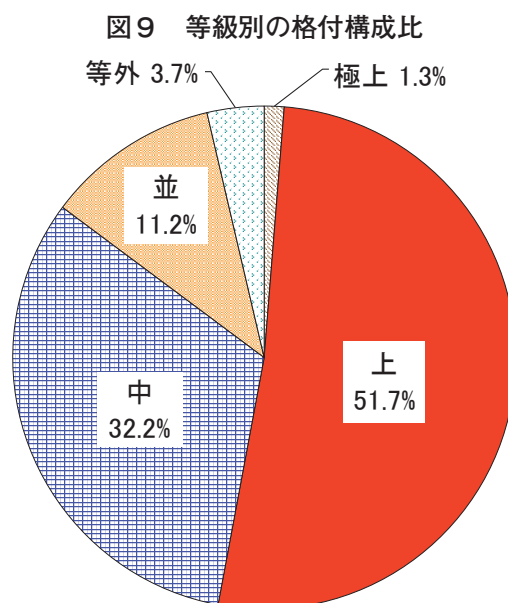
資料：(公社) 日本食肉格付協会

注：カッコ内は前年比。

(同2.0%減)、「並」が136万3845頭(同0.8%減)、「等外」が44万6482頭(同3.1%減)、「極上」は15万5651頭(同3.8%増)となった。

(注) 豚枝肉取引規格の改正については「畜産の情報」2023年9月号「豚肉取引規格の改正と新たな情報提供サービスについて」(https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002896.html)をご参照ください。

7年の等級別の格付構成比を見ると、「上」が51.7%(同0.0ポイント減)と最も多く、次いで「中」が32.2%(同0.1ポイント減)、「並」が11.2%(同0.2ポイント増)、「等外」が3.7%(同0.0ポイント減)、「極上」が1.3%(同0.1ポイント増)となった(図9)。



資料：(公社) 日本食肉格付協会
注：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない。

(畜産振興部)